

新発田聯隊史余話（こぼれ話）

元新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

平成26年3月15日、白壁兵舎広報史料館が移築落成し、同年5月11日から一般公開され、早や2年が経とうとしています。この間、来館者は5万名（平成28年2月現在）に達し、新発田市観光の一翼を担うまでになっています。

この兵舎は明治七年（一八七四年）建築の建物であることは文献により明らかとなっていますが、当時の設計図、絵図面等の記録がなく詳細は分かっていません。

そこで白壁兵舎について、聯隊史の中に余話として記載されていた文章を紹介させていただきます。

【余話その一】

「白壁兵舎概史」

白壁兵舎の位置は、ほぼ古の新発田館（砦）「本丸」の一郭と想定されており、新発田城当時「古丸」と呼ばれた東郭にあたり、初期には鍛冶小屋、大工小屋、蔵屋敷が櫛比（シッピ：隙間なく並んだ様）し、後代には「御米蔵」が置かれた所である。

明治の御一新により、新発田城は時の兵部省に引渡され明治七年、城郭の廃材等も利用されて、建築が始められた。

当時陸軍の教範類が仏国式であったことから、建物もフランス風建築様式が採用された。他方和風城郭建築技術の名残も留めた漆喰塗りの純白でモダンな兵舎であって、現存する旧兵舎建築としては全国でも数少ないものの一つであろう。

ところが現在は、建築当時の設計図はもとより、絵図面・写景図・写真類や其後の修理記録等の文献は皆無で、学術的には殆んど解明されておらず、辛うじて天井回縁・階段・玄関（屯営記号を残す和風鬼瓦、細工された洋風欄干、柱）等外観を通じて往時の面影を偲ぶほかはない。

然し、その歳月よりして全国でも珍しいこの兵舎は、現在国指定重要文化財国立工芸館「旧近衛師団司令部庁舎」に次ぐ明治健軍期の建物として重要な文化財的存在であろう。

ここで白壁兵舎建築当時の状況を、現存する若干の文書の記録により再現して見ると、「兵部省受取り時の新発田城は、郭が本丸・二之丸・三之丸に跨り、建造物は二重櫓門が

五大門の通り、現表門を始め五棟、天守閣相当の三階櫓、二重櫓と現隅櫓を含めて十棟あり、他に藩侯殿舎、学寮、軍務局、知政庁等と、真に規模膨大なもので、順次これらを破却しながら新兵舎が建築されて行くと伝う」

近年の新営舎建設時にも似た光景であったものと想見される。

城郭は明治六年（一八七三年）二月三日一旦廃城となり、五月十七日陸軍省への正院達により再度在城となり、大蔵省より受取り終戦まで在城した。又明治十年三月三十一日、陸軍省達で「第一軍管内第十二営」の兵舎番号も決定された。

下って、歩兵第十六聯隊当時は、長く第六・第七中隊兵舎（第二大隊）となり、軍備整理後、被服・兵器庫等に、留守隊編成時には留守第二中隊が使い、日中戦争以降には多くの動員部隊が兵舎として用い、昭和二十年九月六日、陸軍省副官発「戦争終結に伴う国有財産の処理に関する件」の通達により、町裏練兵場等と共に大蔵省に移管された。

その後進駐軍、文部省を経て保安庁に移管され、使途も変転を重ね、現在は「陸上自衛隊新発田駐屯地史料館」として健在を誇っている。

逸話は、隣接第五中隊、後の第三中隊兵舎が戦前戦後二度も炎上したが、何れも類焼を免れた真に幸運な兵舎である。との文章を見つけました。

これらを踏まえ、白壁兵舎の一般的な紹介をしますと、「この建物は、明治7年（1874年）新発田城址の一角に、編成まもない陸軍の兵舎として建てられたもので、当時陸軍の様式がフランス式であったことから、兵舎もその様式を取入れ建築された。外見は純白の漆喰塗りでモダンな兵舎であった。

明治時代の日本建築には見られなかった小屋組屋根と左右対称の入母屋屋根、洒落た和洋風の玄関、上下に開閉する窓、階段の飾り欄干や、高い天井と回縁等に当時のモダンさがうかがえます。建物の大きさは、幅11.4メートル、奥行き12.8メートル、高さ11.6メートルあり（移築時は幅8.0メートルとなる）威容を誇っていたものと思われます。又、一部新発田城取壊しの廃材を利用し建築している事が確認されています。

現存している旧軍兵舎としては、国内最古のものであり、平成28年現在で築142年目の建物になります」

と、なるところでありますが、前にも申し述べましたように、資料不足のためこれ以上のことは判明しておりません。

然しながら、前記の概史による時代背景と城を破却しながら建築されていったとの伝え等を読み解けば、兵舎の由来として十分納得できる内容ではないでしょうか。

【余話その二】

「歩兵第十六聯隊の雪中行軍」

第一回投稿記事の中で、明治三十一年三月一日（火曜日）発行の歩兵第十六聯隊雪中行軍新潟新聞の内容ですが、機関新聞への投稿記事となったため、字数の関係からか紹介出来ていない所が沢山ありました。其の中から「新発田、津川間行進の様相」を紹介したいと思います。

「混成中隊（戦時一中隊、二百二十六名）が新発田兵營を發したるは、二月十二日午前六時にして、聯隊よりは見送りとして特に第一大隊を五十野村（新発田市五十公野）まで派遣し、ここに混成中隊は分かれて前進し、北蒲原郡米倉村（新発田市米倉）に達す。

同所よりは積雪平均一尺にして、行進頗る困難を極め、行くに伴い雪は益々深く、赤谷村（新発田市上赤谷）附近にては道埋もれて進むを得ず。

漸くにして同所附近の有志者五十名程出て来りて、雪踏みをなし道を開き足るため赤谷に着することを得て小休憩をなしたり。

同所にては村内の有志者、赤十字社員等来りて一行をねぎらい、茶菓の饗応をなせり。

暫時休憩の後、同所を蚤し（ソウシ：早々と退散すること）十一時十分綱木（阿賀町綱木）に着し昼食をなす。同所は六尺余りの積雪あり。

綱木より新谷農（阿賀町新谷）、八十人にて雪踏みをなしたるため、行進するを得たるも漸く進むにしたがい吹雪起こりて一行の困難一通りならず。

諏訪峠に着せし頃は、雪風激烈を極めたりしも、漸くにして津川（阿賀町津川）を隔てる一里のところに着したる時、松明を携えし槍夫（公役に徴用された道案内の人夫）の来れるに合い、辛うじて津川に着せしは、七時二十分なりき」とある。

このコースは、新発田～赤谷～諏訪峠～津川～野沢を経て会津に抜ける全長92キロの街道で、会津街道と呼ばれている道になります。明治17年には阿賀野川沿いに沿った道路（現49号線の基となった道路）も完成していましたが、ほぼ直線にコースを取ったため会津街道を通ったようです。

現代のナビ計測によると、新発田駐屯地から赤谷、綱木経由津川（阿賀町役場）まで総距離43キロメートルあります。この距離を午前6時に出発し、吹雪と深い雪のなか、到着が午後7時20分とすると、実に13時間20分の行軍となります。文中、「辛うじて津川に着きせし」とあるが、松明を携え突進んで来る槍夫（道案内）に出会った時は、さぞ心強かったに違いありません。

この後中隊は福島県に入り、喜多方、檜原峠、アララギ峠、米澤を経て小国街道に至り、数々の研究成果を携えて、8日間の行程を以って新発田に無事帰還しました。

この行軍での教訓は次の文章に集約されています。

「積雪中、軍隊の通路に就いて（関して）は吾人（われわれ）の尤も顧慮するところなりと雖も、若し出戦の為国内を通行するに際しては、吾人の予想する如く必ず困難ならざる可し。

何となれば（なぜならば）各地方の有志者及び土人は必ず歓迎の一つとして、道路の開通に従事す可く。若し之を為さざるときは、之を地方に命ずるも容易なるを以て、案外道路の開通は兵を勞せずして之を為し得可きを知れり。

今回の行軍に就きて、土地の有志人民は多少道路の開通に従事し、我が行進路を容易にしたる地、少なからざるを以て、実際出戦の際に於いては必ず土民は挙って大なる道路を開作すべきを以て、今回の如く通路の不便を感じざる等の事なかる可きを察知せり」

又、混成中隊の編成は、各中隊から屈強なる兵士を選抜したとあるが、当時の装備では必ずしも順調に行った訳ではなく、靴擦れ患者一名が、脚線炎を合併して歩行困難により受診者があったとある。さらに一般の疲労に伴い眼病患者が多く発生している。これについては次の様に書かれています。

「今回の実験に依れば、一中隊に於いて少しく眼病兆候ある者は各自色眼鏡を附可せしに、其の数およそ四十名の多きに至れり。而して該当者中尤も甚だしき者五名にして、内一人は全く両眼を開く能はず。遂に一等患者となり、盲目者同様の取扱いを為さざれば行進し得ざるが如きに至れり。

其の色眼鏡を許したるを以て、多少其の予防をなし得たる為、此れ予想し能はざる所なりし。眼病患者を生ずる原因は、日光の反射及び疲労等に依るべきも、行軍二、三日を経過せる後にあらざれば此の患はなく、且つ各自睡眠の度足らざる場合、或いは行程甚だしきときに於いて尤も多きを見る所なり。

之が予防の方法は、煤色、藍色の着色極めて薄き眼鏡を用いるを可とすと雖も、之を大部隊に供給し得るは困難なると、且つ携帯上破損等の不便にして、軍人には適せざるにより、眼簾（遮光用のすだれ）を用いるを便とす。之には紗切（薄い織物）を用いるを良しとす」とあります。

尚、古い聯隊歴史には、この時のことを「明治三十一年二月十二日、雪中行軍研究のため戦時歩兵一中隊を編成し出発せしむ、同中隊は若松街道、檜原峠、米澤街道を経て同廿日帰営す」との簡単な記載がありました。

又、聯隊は翌年の明治三十二年二月一日、「雪中行李運搬方法研究のため、戦時歩兵一中隊を編成（軍隊の戦闘または宿営に必要な弾薬・糧秣・器具などを運ぶ部隊）し出発、同中隊は上赤谷、津川郡岡を経て坂下（現会津坂下）に至り、同路を経て九日帰営し、往復とも専ら橇（ソリ）を使用し行李約一大隊分を運搬し良結果を得たり」とあります。

【余話その三】

「太平洋戦争の出征」

出征兵士を送る壮行式は、日露戦争以降各地で執り行われてきました。ここ新発田歩兵第十六聯隊の将兵出征にあっても同等で、兵営の正門から新発田駅まで人の波があふれ、日の丸の小旗を振った歓呼の声、或いは兵士の名前が入った出征祝いの登り旗等に送られ、駅頭に於いては盛大に壮行式を執り行っていたようです。

当時新発田町長であった、原町長の感想を紹介しますと、「私は、戦時中、日華事変勃発から終戦までの約八年間を、町助役、次いで町長の任に在りました。

部隊の出征光景につきまして、その感想を二、三申し述べますと、事変初期に、中支方面へ出征された添田部隊（歩兵第百十六聯隊）の時は、駅頭で盛大な壮行式が行われ、旗の波で歓送したのですが、それも紀元二千六百年（昭和十五年）奉祝頃迄でした。

太平洋戦争の突入する直前頃には、防諜上もあり、盛大な歓送は取り止められ、昭和十六年十二月、師走の迫る南方戦線へ出征の広安部隊の場合等は、部隊よりのマル秘の連絡で、一人町民、県民を代表し、暮夜密かに吹雪の駅頭でお見送りいたしました。この頃は深夜になると一人提灯を提げ駅頭に行くことが日課となっていました」と述べています。

※広安部隊とは、歩兵第十六聯隊長、広安寿郎大佐率いる新発田聯隊のことで、この時は裏門から夜間密かに新発田駅に向かい、汽車の窓は全て閉じられ寂しい門出であったという。

聯隊は、昭和十七年十月二十五日、ガダルカナル島のルンガ（米国名：ヘンダーソン）飛行場の夜襲において、熾烈なる迫撃砲の弾幕射撃及び機関銃により、将兵の過半数となる一五〇〇名以上が一夜にして戦死し、聯隊長も戦死するという、激戦の地で戦った聯隊でした。

今回の余話はここまでです。